

新人合宿

報告書

1999.5.23. ~ 5.30.

上高地
涸沢



信州大学山岳会

GW 合宿 IN 来 戦

1999, 5, 1.2 上級生
全員

5/1 BOX 集 車 三本滝 ~ T.S 位ヶ原
⇒ 雪言 場所

5/2 T.S ⇒ 雪訓 場所
~ 三本滝
= 松本

男にカンバは
なった……

雪訓は大変なの
楽しいのが入り混じ
っていた。

ヒマコンびやがネを
こわした。

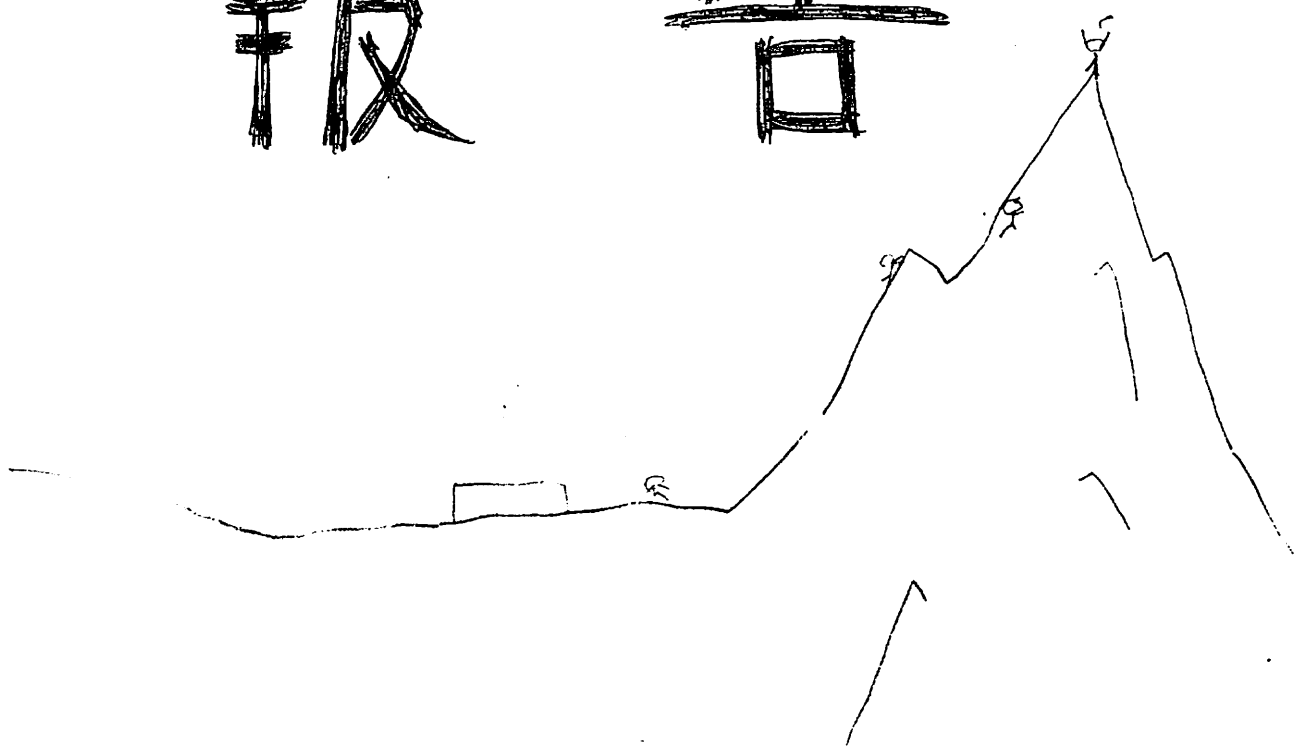
快晴の
良い
2日間。



新 人

合 宿

報 告



'99 新人合宿記録 5/24 (月) 雨

5/23 (日) 晴れ

- ③ 5:00 集合 ④
- | | |
|------------------|--------------|
| 6:50 島々谷 出発 | 6:50 登 |
| 7:30 二俣ト礼台 到着 | 7:30 二俣ト礼台 取 |
| 10:05 岩魚留小屋 着 | 10:20 岩魚留小屋 |
| 14:50 徳本峠 着 | 14:45 徳本峠 |
| 17:25 明神手前 T.S 着 | 17:25 T.S |

いやあー、きつかった。肩が痛すぎる。
それにしても、エグ中村は何者なんだ。
誰か、アイツを止めてくれ。カシ

What we did today were something
hard and tough. That's all I remember

K. Goro

(Ride on, ride on!)

- | | |
|-----------------|---------------|
| 6:00 エッセン起床 | 10:30 横尾着 |
| 7:50 明神手前 T.S 発 | 11:30 横尾 BC 着 |
| 8:55 徳沢着 | |

歩き出してすぐに雨が降ってきた。
B.C に着いてからずっと雨で寒いよ。
服はすべぬぬで、夜はテントが
ゆさゆさゆさして恐かった。つらいー 眠るよ

石岡

ボッカが終わった、ただそれだけ……
松崎

5/25 (火) 雨 → 晴れ

- | | |
|-------------------|---------------|
| 4:00 エッセン起床 | 13:05 涸沢ヒュッテ着 |
| 5:25 BC 出発 | 15:30 BC 着 |
| 6:30 雪渓の悪化により Fix | |
| 10:00 涸沢ヒュッテ着 | |
| 11:15 雪訓場所着 | |

今朝の FIX はおいしかった。涸沢走りはさすがに体が
おれい言いつつ、明日がギリギリ (笑)

1/2 はりの走れたら、2/3 は涸沢走り！ 他にエグい言
をささるひともあるから、先がわかる。これはエグ
道として、涸沢道を > へおしるせ (笑)

3回目の涸沢走り、年々嫌になる。明日も
みおさんがんばって走りましょう。 (笑)

5/26 (水) 晴れ

- | |
|---------------|
| 4:00 エッセン起床 |
| 5:20 BC 発 |
| 8:25 涸沢ヒュッテ着 |
| 雪訓 |
| 13:15 涸沢ヒュッテ発 |
| 15:30 BC 着 |

2回目の涸沢走りも死んだ。ここの3.4年の
不登不降、せいぜいかたてたのか (笑)
雪訓ははる言いつつ、早く終了してほしいか？
おにぎりまで食べた (笑)

涸沢走 2年に1回、3年とったかと思っただけから
は、望年期。またおにぎりバリバリさ
1.2年！ こみかすヒバシバシしてせよ！ さくしな？
野田

5/27 (木) 雨

雨と風の中の蝶ヶ岳。4人でん
するよりは良い経験ができた。
今日の飯は楽しめた。中じんと
ノックの差し入れには感謝、感激。
キツネよブッ殺す必

蝶ヶ岳隊 (本隊)	BC本部 (嶋、か)
4:00 エッセン起床	4:00 エッセン起床
6:05 BC 出発	6:00 体リ-
10:50 稜線手前	10:00 かい 中島 BC入り
11:10 BC着	13:10 体リ-

3日目の蝶。登山道は川になり、木はふたつき、
稜線での風は1分にと、ではつらいのだと思う、
曲がりはいけたが、1回ふたつきは好むとふたつき、
おかげでいい、田

5/28 (金) くもり、時々雨

4:00 エッセン起床

5:15 出発

アと雪割が落ちて肩の荷が重た。あと残り
一月で下界に戻ると思うとうんざりしてしがたなり(涙)

初めてのビョーフ。高度感があり、
他の岩とは違っていた。それにしては
怖かった。しかし、充実した登攀だった。
また来年行こう。今度はリードだ!!
一年よ!! 行くぞ!! (カシ)

明日は「ヤリ」に行く。ま、いい、いやいい♡
みんな頑張りますよ。

山ガ

5/29 (土) 晴れ

エッセン起床 2:30	12:00 蝶ヶ岳山頂
3:40 BC 出発	13:00 肩の小屋
4:05 横尾	14:30 大曲り
5:40 槍沢 ロッジ	15:10 槍沢 ロッジ
7:05 大曲り	17:10 BC着
9:40 殺生ヒョウテ	
10:30 肩の小屋	

この日は 2時半 起きて 晴いうちに 出発した。

明るくて、天気が快晴で空が青くて自に良かった。
槍の頂上からは北アルプスが360° 見渡せて 非常に
感銘を受けた。 石岡

槍沢はしりの最後の方は、なんだかニコニコしてました。
しかし、やっぱりかかっていたみたいで、肩までかくのに一苦労。
まあ、今日は晴れて、みんな大槍の頂上から見えていいや
と思っ、小槍隊。まず大槍までサクッと登って、まあ小槍だ。
……。2度目の大槍山頂はすばらしい眺めでした。
1日は2度とヒョウをひらきながら、僕はあかせ者です。

(カシ)

5/30 (日) 快晴

7:00 起床	10:25 墓参り
BC 撤収	11:25 徳沢
9:00 出発	13:00 上高地
10:15 新村橋	

今日で合宿は終わり。

ちょっとさびしいけど、充実した
合宿だった。河童橋のダイブは、
やめられない。これがないと
合宿が終わった気がしない。

(カシ)

斜... 新人合宿が 終わった 無事に である。そこは
 は歩荷を走り 雪割に 開口する 1, 2年生。そして少
 しずつ 多くのこころを伝え 丹精に かつ安全に 合宿を
 運営して いく 努力が 上級生の 姿が あり、た
 最上級生 となった から た かつ 合宿中の
 1つの 動きや 言葉、努力の 姿を 美しいと 感じた。
 今までの 合宿は 何となく 通り 過ぎた けれど、たのしみ
 うが ちよと 2人 しい のが あり、ふと そんな ふう に 思っ
 ます。

合宿に 出席して、それを 出して みる しかないの、と思
 っていたが 何のこころ はない、足もとを 見ると 雪が 先
 方まで 必死で 走った 後の 道を 下りて 歩いている だけ
 なのだ。サックの中には まだ 忘れ物も 多い、未熟な
 ちよ、もう一度 家に 帰って 忘れ物を とって くる。ついでに
 熱い コーヒー を 一杯 飲んで、息を 吐いて、... ちよが
 うが ぶく ぶく した。こころ には 改色 ではなくて 創造が、残
 っている 以上の こころ を 作り 出す こころ が 可能 なの だろう
 が、あー たのしみ 一杯、 疲れた 体 になって...

この合宿では 多くの 失敗と 後悔と 喜びと の かけ 合い
 があり ちよに された。充実した ... 合宿 だった と 思う。1年生
 にも 普段 木かえ がある 充実感 満足感 を 得て いる ところ と思
 成り かな、せいかと 言う には 俺自身 も 少し 度胸 が ほしい。

最後は 最近 自分の中で さらなる 言葉 として

失敗は 必ず 肯定 される べき である

失敗を 恐れず、失敗を 肯定し、そこから 学ぶ 時、それは 最大
 の 結果を 残す こと、

以上 ちよが 言った こと、

野田 聡

4度目の新人合宿が終わった。

過去の合宿と比べて痛感したのは、指示を出す側と待つ側との違い。頭では分かっているつもりでも、なかなか行動に移すことは難しい。

ただ、1,2,3年生と同様に合宿の始まる前と後では4年生にも変化が見られたと思う。1人1人が何かを得る事ができた合宿だった様に思う。

今回、隊として評価できる点は、だれ1人体調を崩さなかった事とやれる事はやった事。雪訓が十分にできたか、たり、残念な点も残るけれど、リーダー会での決定事項を常に前を向いていた。これ以降の合宿でもかかりたい。

個人的には北尾根にまたも行けなかったのは残念無念。2年の時、登れるチャンスをおたえられたのに、行けなかったのがたましい。1度機会をおかすと、次はなかなかやれて来ないという教訓。

「新人合宿には独待の雰囲気がある」

自分が1年の時にリーダーだった山内さんが言っていた。その通りな気がする。そんな独待で、自分の好きな場所(零回気)に出合っことができた。オレは良かったと思う。

“倉沢”では、3年前の自分と、今の自分は大きく違うんだという事を強く感じた。いろんな面で。

それから、自分の前を行く岸本を見て、くやしそうな、なまけた様な、うしろしい様な、ホッとした様な、悪い様な、そんな複雑な気持ちを感じた。

(感想) 諸々の事情により、途中参加となり北穂高のみの登山となった。合宿は多彩な一年生のため非常に楽しかった。天気も良く、最終日皆が行った槍は忘れられないものとなっただろう。

(反省) いつも同じ反省が出るので、あえて書きたくはないが、体力不足、4年として皆を見る余裕にかける事。

北穂高～洞沢岳への縦走の登山隊の時、出発が遅くなるなど
気のゆるみがあったことか反省として挙げられる。

反省と感想

4年 表谷水郷

反省…今回で最後となる新人合宿、自信を持って反省なんてなにもない、というのが本来の4年生の姿であろう。そして今回の合宿、私には特に反省はない。

反省とは一般ピープルと照らし合わせて客観的に、自分の言動、あり方の可否を考察すること。だから、主観的に生きている私にとって反省という言葉は存在しない。存在するのは後悔という言葉のみ。ナンチャッテ(´_`)ゞ(^^;オイオイ

感想…率直な感想を言わせてもらおうと、4年間の中で一番楽しい新人合宿であった。山の良さを共感できる仲間が増える事はよいことである。下界に降りてきたときに、寂寥感を感じたのは久々であった。



早いもので新人合宿も3度目を数えた。3回目ともなると慣れたもので、僕にとってはこれまでの中で一番ゆとりを持って合宿だった。ゆとりができると余計な考え事をするのが僕の癖で、合宿中、行動しながら独り考えることが多かった。自分について、山岳会について、これからのこと、やりたいこと、やらなきゃいけないことがグルグル頭の中で回って、まるでどうしようもなくからまったザイルのような状態になつて、いきまぐ放り投げたい気分は何度かはあった。さらにこの上に中村の「岸本さんって一生独身ぽい、スмысле。」という発言初日に言われた合宿ある一言が重なり、頭の中のザイルは増えこんでいった。そんなめずらしく金と飯以外の事に頭を悩ます自分を見て「バカもバカなりに年に一度は悩んだりするんだなよ。」とプライドのかけらもないことを考えた。答えを出そうとして急いでも今はザイルは増えからむだけで、後は切るしか手がなくなると。それよりもからまったザイルの末端を自分に結びつけ自分のステップで登り続ける方がいいだろう。意外、しばらく登って振り返れば、自分の後ろにきれいなラインが一本続いているがもしれない.....そんな風に今は思える。僕の好きなステイニングの歌に「Let Your Soul Be Your Pilot ~魂のパイロット~」という曲があるが、いまの心境はそれに近い。

... When there's no more useless information
and the compass turns to nowhere that you know well,
Let your soul be your pilot. Let your soul guide
you, Let your soul guide you upon your way....

Soulのままだ。この一年飛んで見るとしよう。

P.S 合宿と同時期にアラスカ入りした大木と花谷さんにエールを送る。



反省

岡本

3回目の新人合宿。はっきりして今までになく
いっ実したものになったと思う。3年としての仕事も
できた。反省をあけるとするなら少し手をぬきました
たことと1年にまけたことである。

感想

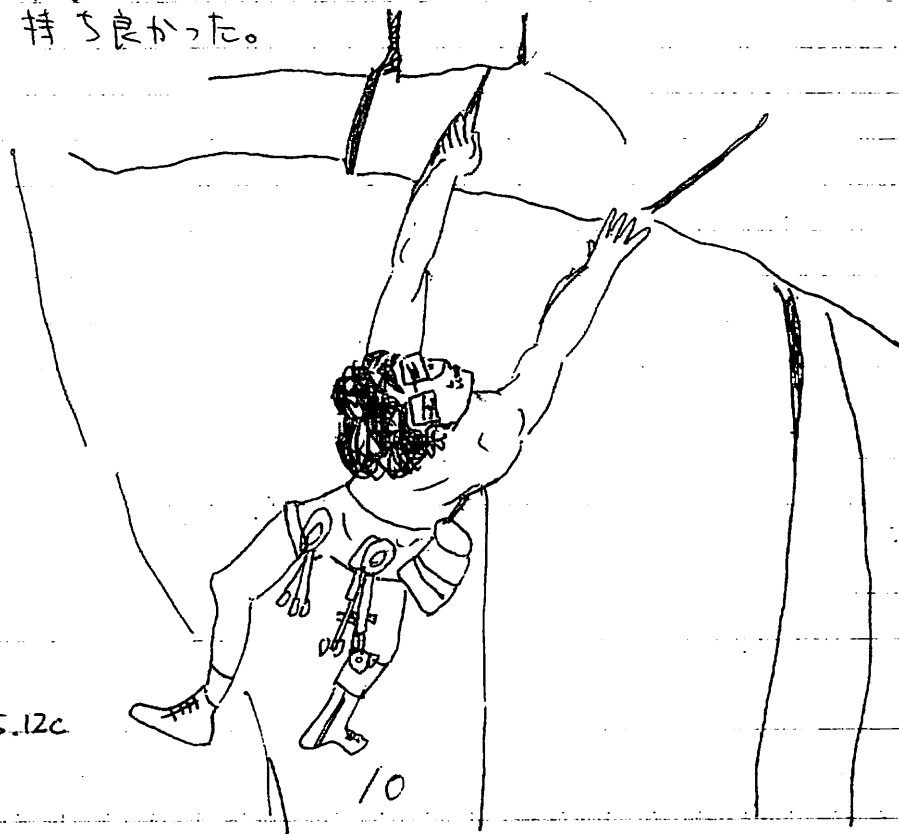
1、2年にとっては全日無駄のない行動でス
パーハートだったろう。やっぱり合宿は
こぢかないと（ちんぷんかんぷんと）+実しない
ものた。またリーター合宿ことの交たい
というのも、そのリーターがしっかりとくめると
おもしろいものた。個人的にはひょうし
Box隊等、技術的、経馬験的にも満足
た。



新人合宿 反省と感想 白高 弘次

[反省] 3年目でこんな事を書かなければいけないのか、こ-は-も
ないの世が、体力がない。合宿前のム-ニ-不足。
それと、fix についての考慮不足。中間支点、アロテ
ヨニのとり方等。その場で考えればわかるような事でも、気
づかずに進めていた。あせっていたのもあるが、あんなfixを
張ったのはまずかった。

[感想] 3回目の涸沢。1,2年の時とは少しは違った様に見れ
た。でもやはり、俺にとって居心地の良い場所ではなかった。
やはり、緑のある風景がいい。
3回目の雪訓。すごく壊かしく思えた。
3回目の新人合宿後の「ダレ」コケ。やはり梓川はこえた
かった。か、やはりこえなければ合宿は終われなかった。
気持ち良かった。



ヨビミテ溪谷
〈エトリ子〉5.12c

新人合宿の反省と感想

〈反省〉

今回の合宿の目標は、上級生として、一つでも多くのことを一年生に教えることだった。しかし、まだ経験の少なさからあまり、その目標も達成できていなかった。Fixのやり方にしても、ぜんぜん理解していなかった。

そういった意味で、かなり得たものの多い合宿だった。

〈感想〉

個人的には、屏風岩にも行けて、槍にも行けて、かなり満足したものだ。歩荷は、初日より二日目の方がキツかった。ダッシュは、雪の多さにより、かなり長く走った。まだまだトレーニングが足りないようだ。今年は、昨年よりも山に行く。自分でも、どんどん計画を出していこうと思う。

梶原 恵

新人合宿の反省・感想 98S624H 横山 勝兵

～反省～

ムラがあった。注意するときはするが逆に、ポーツしてぬけて
いることもあった。もちろん8日間四大峠中集中しろというのは
無理なはなしかもしれないが、めめまこころほしめる。この基本的
なことを徹底させようと思う。

体力不足。この数ヶ月遊びほうけいて、体カトレーニングを
おこたってしまった。危うく1年生にもぬかされるところだった。
歩荷力はますますたつたと思うが、もう少しスピードをつけたい。

厚訓初日に、FIXを張ることが出来たのは良かった。
おかげで良い勉強になった。

全体を通して、もっと積極的にならなければ
1年生にひびき、もっと天気図勉強しろ。おかげでたろおしえてやる。

～感想～

充実していた。歩荷、洞沢走り、エッセン、槍ヶ岳。昨年よりも
充実していて、なおかつ余裕があった。昨年はただついてゆく
合宿。今回は下級生がいるなかで自分がちてゆく合宿。
大変そうに思えたが、逆に、昨年よりも体力的にも精神的
にも、会の中での存在にしても余裕をもってすごせたと思う。
そしてそういった行動が楽しくもあった。まだまだ未熟
だけど、それはこれからの楽しみでもある。

あと、小槍に行けなかったのは非常に残念。アイゼンさえ
あれば...。まあ準備不足かな？次回楽しみにしています。
たぶん一緒にアゲンおとりにおとりますよ。

河童橋ダイブ 最高。

新人合宿 最高。

横山 輝生

(反省)

合宿全体を通じた反省は、2年生として1年生を指導する、という自分の立場をしっかりと意識していなかったこと。

去年の新人合宿時の自分を考えると、1年生にもっと教えた方がいいことができる事があったように思う。

個人的には途中下山を固にはさんだため、合宿に対する意識がゆるんだこと、2年生の他の係へお礼が漏れてきたこと。

F1x隊として早く行動できず、本隊を遅らせてしまったこと。

(F1x隊としての自覚がうすかった。)

等があった。

考えれば、自分が「2年生としての新人合宿」というのは1度しかないわけ。これから行われる1回1回の合宿を大切にしていきたいと新めて思った。

(感想)

よく分らないが“自分が山の上にいる幸せ”みたいなものを感じてしまい、やっぱりおもしろい？と1人考えた。

周りのみんなを特に他の2年は一段と成長していたので、

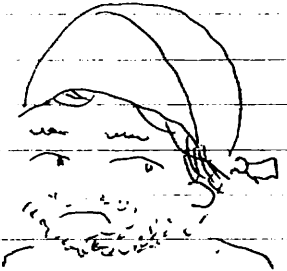
とてもいい刺激になった。自分も努力した分だけ力がついたのを感じてきたのでよかった。

檜からの絶景、B.L.での生活、やっぱり檜からの夕日等

1年生には十分すぎるほど印象深い出来事だったと

思うし、自分にとっても思い出に残る合宿だった。

去年と同じくらい



今年、山岳会に入会した私は、5月23日から30日までの8日間、新人合宿に参加した。今回の日程を簡略に述べると、初めの2日は、B.C.までの歩荷。次の2日は、湯沢での雪上訓練。27日は大雨の中、蝶ヶ岳へ行き、28日にまた湯沢で雪上訓練、29日は檜ヶ岳、30日に徹夜、上高地を経て松本へ下山、というものであった。

この合宿で様々なことを感じ、また考えさせられたのだが、それは大きく分けると三つあることになる。

一つには、非常に体力的にきついものだったということである。勿論、自分の今までの運動不足や不摂生という理由もあるのだが、それを差し引いてもつらい毎日だったように思う。特に歩荷はちよと言葉にできない程、苦しい仕事であった。私の荷物は約35kgだったが、肩にこもり込むその重さは一歩毎に増していき、徳本峠の頂上で終に力尽きてしまった。山を歩くための体力の向上の必要性を痛感する結果となった。

次に、山での生活の厳しさである。普段、街に住んでいる私は、実は多くのものに守られて生きていたということを知った。車やコンビニなどの便利さに関しては割と意識の内にあるものだが、屋根、壁、電灯、湯等の大切さは今回、実感することができた。そして、何かかとも自分がしなければならず、生きるためにはこんなことが必要であったかと改めて感じられたことが少なくなかった。

最後に、自然の美しさである。歩くのに手一杯で十分堪能できなかったのだが、それでも木々の青葉や梓川の透き通る流水、雪に残る峰、沢を渡る風、そういうものが、山の中で石開がけた自分の感覚に染み込んできて、ほっと、それだけが自分のここに存在理由になっていた。

新人合宿での私は押し寄せる洪水を何とか切り抜けた格好だった。一息ついた今、ようやく、その意味をかみしめている。

どうやら私は信州大学山岳会を甘く見ていたようだ。二山ほど危険でハードな合宿だとは思わなかった。1日目の歩荷でその間に気付いた。荷物が重くて耐えられな
 いと感じたのも初めてだし、肩があのほどしめつけられ痛い思いをしたのも初めてだった。
 1物1物生きているという実感をもたなからずこなしていた。者段何気なく大学生生活を送っ
 ては絶対感じることにできなかった。エッセントになった時の朝は3分以内
 に火をつけないといけないうで泡たてた。寝床でMSRをよかまに立ててしまった。体に
 良いこととはとても思えない。

私が一番辛いと感じたのは歩荷ではなく雪上訓練だった。一回目の雪上訓練では、
 ハリ以外で頭をしめつけられた圧迫感と向所に打つ恐怖感で歯が痛くなった。2回訓練
 ところでは打ちかた。緊張で歯が痛くなったのはセーターの時以来だった。そのとき見本を見
 せる梶原さんの動きが軍隊のように50年前にタイムスリップした感嘆をおぼえた。ビッケル
 ストローはなかなかうまく削れず、最終回に止まるようになった。訓練が終ってから
 1年生全員でビッケルストローの跡を見せあつたのが、自分が一番打ちかた。

合宿中は自分のことしか考えない自分がいた。自分のことで精一杯で周囲のことなど
 考える余裕がなかった。周りのことまで手助けできる上級生がすこしいと思った。山岳会は
 本当に山を愛し、変な話山で死んでもいいと思える者が活きたと思ふ。軽い気持ちで入った合
 宿は私を痛いほど感じた。

人の

連載コラム①

『私とブリ毛』 3年髯本

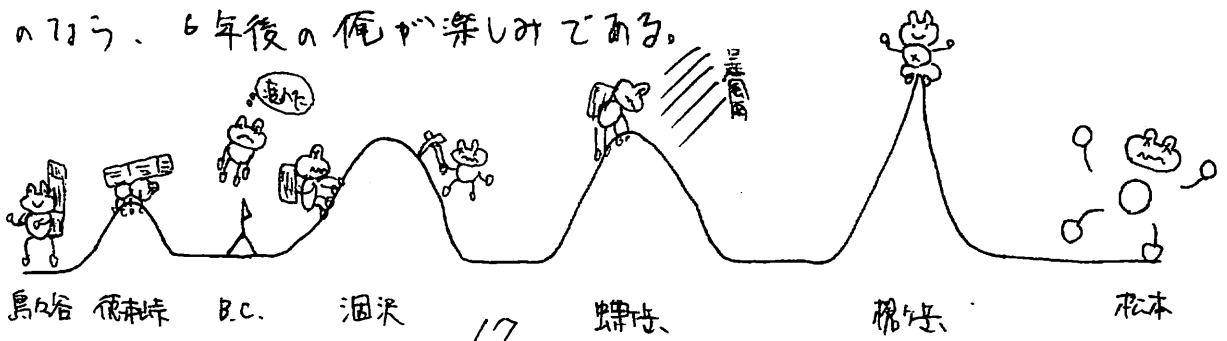
私はブリ毛が濃い。「ブリ毛」とは世間一般に言うところの「ケツ毛」のことでありまして、
 私のそれはイタリア人のムサ毛、ノックのヒゲより、非常に濃い。別に特別なメン
 グなども一切した事とむすいのに、私のケツには中学卒業辺りに、しっかりと
 おケ毛が備わっておりまして。それを見た当時の私の友人は、「アイツはチン毛より
 も先にケツ毛が生えた。」とクラスメートにぶいれ回すなど、悲しい思いをしたこともあ
 りました。そんな私のケツ毛も男子高に直み男だけの空間で生活する間になくなり、
 我然、強みというが、濃度を増して、それはいつの間にか私の最終兵器へと成長す
 るに至るのであります。大学へ直み。当山岳会も3年目となり、今でもそれは変わらず。(P191
 続く)

久しぶりの合宿であり、心身ともに疲労困憊でした。山岳という今まで活動したことのない分野では、要領もわからず、ここ2.3年の不摂生もあり、下山後は体がバラバラに感じた感じでした。下から、山の迫り、頂上からの絶景は、日常の生活では得られないものであり、自然の中での生活は日常の苦悩をぬぐいさしてくれました。山に魅せられました。

8日間の活動はいずれも自分を考えさせるものであった。歩荷溜沢走り、橋走り、いずれの活動でも死んでしまい、全身の足を引張ってしまった。今後の活動を考えると基礎体力、心肺機能の回復、増強は勿論、持病の椎間板ヘルニア対策も考えなければならぬ。全てのことから一度に、一気に問題解決するわけではない。日々、少しずつ、あせらず頑張っていく。

山での生活は、メリハリのあつたものであった。日常の生活では、時間にルーズになりがちであるが、山での生活で時間に対する考えを改めさせられた。食事翌日の鋭気を蓄えるうえでも分量に気をつける必要があるであろう。下山後も合宿のくせが抜けにくい。体重の軽い自分にとっては、体重増は必要なことである。食って、寝て活動し、パワーを得るのみ。

今回の活動も含め、いずれも冬山に備えるための準備ということであり、今から冬山の厳しさが目に見え、しかしそこには素人が求める何かがあるに違いない。それを俺も見たい。その時、自分ももう一つ別の何かを掴むのかも知れない。この合宿でも、何かを掴めた気がする。この会で再度の学生生活を充実させることのできるよう、6年後の俺が楽しみである。



新人合宿で学んだ事

中村圭一

重みでザクザクが肩にくい込み、汗を流しながら、しかし苦学の後には必ず何か得る物があると信じ、オレは必死の道を歩いた。

朝5時夜はすっかり明け、まるで新入生を歓迎してくる様な朝であった。いまは待ちに待たれた日があった。信州大学山岳会メンバーとして合宿に参加する日だ。その時の興奮は、苦心の末大学に合格した時の様な物ではなく、何か清しい思いであった。だが島の谷に落ちた時にはこれが食糧と不安に変わり、一週間いたる山に溶け込んでやるという思いが霧をこえていた。歩荷は本当に辛かった。これは思春期に赴く心の辛さでも、勉強の辛さでもない何か別の物であった。だが、オレの信念がその辛さを上まわっていた。何ごとも楽しくやってみよう、楽しくなければやる意味がない。だからオレはしゃべった。なぜならこれがオレ自身を楽しくして楽しむこととしてくれる物であったから。

後からカギを入れたら、徳本峠の最後の登りを1歩ずつ登りつめると同時に、オレの頭の中で、予備の頃からの山登りをしていた事、中学のころから信州大学山岳会を目指していた事、高校でのアメリカ留学からの帰国後、山への思いが残っていた事、浪人時代予備校の私大文系クラスにいたにも関わらず、密かに信州大学を目指していた事、山に対する思いが様々な形で思い巡っていた。と、その時、何かの衝撃が頭の上から足の先にめぐっていた。いきなり巨大な岩山が目の前に現れた。オレは一瞬立ち止まり生づきを飲んだ。そう、これが答えだ。今年、4年間山岳会をやらないという自分と同時に、山岳会を辞めたことを見る世界が狭くなるという、これほど重要な自分がいた。だが、その答えは西方の自分を打ち消し、新たな自分を作り出した。今入っている3つのサークル全て4年間やり通す、これは山岳会を辞めた事、迷っていたりする事以上の、自分を強くしてくれると思えたから。

それと同時に、オレは確然と聞いた。いやこれは風の音だ、たかおれられない、けどオレには、まだ聞えた、『圭一、お前を待つて待っている』巨大な岩山が吐いた言葉である。だからオレは、この言葉を征服や挑戦という語ではなく、調和の語として4年間とれた山と調和できるかを目標にがんばっていく。

今、新人合宿が終わった1週間たった。今振り返ると、楽しかった事しか思い出せない。予備校の中での一時、1本とっている時、様々な人とのつながり、最終日の食事、一発芸

そして焚き火を囲んでの会歌の熱唱。この思い出は私のアメリカ留学中の思い出と同じである。アスカた事は何かと覚えていない。ただ「楽しい事だけが走馬灯の様に見える。だから私の留学は成功だったと思ふ。もちろん今回の新人合宿も私自身にとり成功だったと思ふ。ただ一つだけ高校時代と今では変化の点がある。それはこのアスカを3回返り、じっくり分析する力がついたと思ふ。これが無い水上運動など、また成功などないのである。

今また下界の雑とにまぎれ、普通人を装い暮らしているが、おてん心は山に向かっている。だが最後に一番重要な事が残っている。これは今日の新人合宿の反省でもあるが、心や気力があっても、体力がなければ「調和」という言葉は生まれこない。体力と気力が一致して、山と対等にあって初めて「調和」という言葉は生まれこるのである。

私の山との調和の旅は今始まったばかりである。今はかむしゃぶにこの調和を求め、悔いのない人生を追い求めたい。

P167)

1年目の新人合宿から「ケツ毛マッチ」を3回を勝手に開催し、現在に至るまで、幾多もの挑戦者をしりぞけ、連戦連勝、向かう所敵なしの快進撃を続けております。強者ぞうの山委会の角々にして「アイツにケツ毛じつは勝てる。」と言わしめる程、私のフリ毛、ケツ毛は濃^まい。そして強いのであります。多感な思春期は人一倍、濃いケツ毛に思い胸中、一時は、エスデdeシロド行キも考えた程でありましたが、行かなくてよかった。今や私のケツ毛は「私」という人間存在をまえる上でなくてはならない重要な一要素とまでなつたのであります。……

イマジュー 99年 5月23日 Boxiにて。

新人合宿についての感想

正直言うとあそこまでキツイとは思っていませんでした。本格的な登山経験などまるで無く、文明社会に浸って生きていた僕にとって山での生活は驚きと挑戦の連続でした。重い荷物を持ちながら長距離を歩くその名の通りの歩荷。強い足腰と体力をつけるための雪上ダッシュ。命を守るために必要だからしっかり学ベピッケルストップ。その他いろいろな事を上級生の愛のムチ(?)を受けながらも学んだ一週間でした。合宿中盤では疲労が体を体的にも精神的にも蝕んでおり、もうイヤだ、やめたいと思ったこともシバシバでした。そんな中で僕を引き止めていたのは、やはり雪訓技術をマスターした時のあの充実感と、山の頂から見たあの素晴らしい風景だったのではないかと、思います。特に富士山はもうこれでもか、と言うくらい素晴らしいものでした。終わってしまうとちょっとあっけなさを感じるのも事実ですし、後もう一週間くらいいてもよかったかな、と思っているのも事実です。これから夏にかけて夏山シーズンの到来ですが、次回はまた今回とは違う山の魅力に出会えたらいいな、と思っています。

山岳会一回生

野川謙介



エッセンからの反省

松崎 林太郎

- ・準備を事前から指示を出してやってもうべきだった。上級生に言われてから動き始めたので。
- ・レーションの量は、動く日には多めに、動かない日には少なめに調整すべきだった。
- ・個人的には食いシゴキがなくて残念だった。←ウソ、良かった。
- ・最終日の天プラの具のバリエーションをもっと増やせば充実すると思う。エビなど-----
- ・今年は雨が少なくて良かったが、防水にはもっと気をつけた方が良かった。
- ・差し入れしてくれた方々ありがとうございました。

会計報告

横山N

収入 240.000

支出 205.180

{ 食費 102.825

{ 装備 10.355

{ ガス代 92.000

残金 34.718 (使途不明 102円)

※残金 34.718円は装備費に移行

医療の反省

医療岳の中身は、冬合宿からかなり充実したものとなっていて、ほとんどやることはなかった。

今回もっとも多かったけがは、靴ずれである。靴ずれ対策としては、テーピングなどをする以外にあまり効果的なものはないから、厚手の靴下を、二重にするなどして、予防をしよう。

基本的な薬（頭痛、腹痛、風邪など）は、個人で持ってくるように。以上。

梶原

気象の反省

ラジオの入りが悪かったが、きちんと書けるぐらいは、入っていた。

一年生は、全くといていいほど書けていなかった。これでは、山には行けないぞ。日々練習を積んで、夏までには書けるように。

梶原

装備

横山 勝也

すみません。準備おくれました。不備がありました。

- ・青葉テントのバルサンは成功。
- ・ダブルフライ、エスパースフライはチェックが甘く、チェックの足りないものももってきました。人まかせてなく、自分でチェックおぼろけがよかったです。
- ・トランシーバー内の電池も新しいのにかえておくべきでした。
- ・FIX具を多くもってゆけばよかった。甘くみていた。
- ・登山具は上級生にもってきてもらうというのに気がかないで、上級生にたのみののがおくれた。

～消費～

×タ 38本 白かス 6.5L ローソク 3.5本
単3電池 18本 ビニル袋 5枚 はし 3本 (by 妻谷さん)
シュリンゲ 2本 腰ひも 1本 サイル 1本
(7mm 45m サイル 1本 5m 切断)

～来年に向けて～

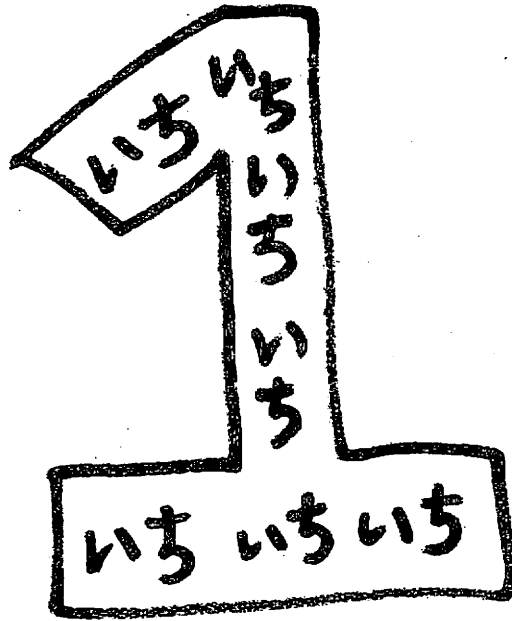
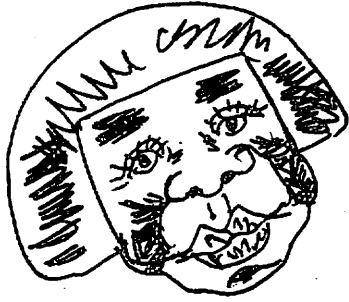
- ・毎年青葉テントはバルサンをたごう。
- ・腰ひもはFIX、登山具ともにもつてゆこう。
- ・FIXを甘くみるな。
- ・ビニル袋(ゴミ袋)は各テントごと1袋ずつつけるよ、ゴミもちらかさず良い。
- ・火器袋というのを今回つくったが、重いという批判もあるかもしれないが、BCをほめるような形式では良いのではないだろうか。どうだね。
- ・あと、電池チェッカーを買ったので、BOXにある電池は先っくして有効に使ってね。

☆全体を通して言えることは大げさにいえば、装備係の担当が決まった時点から準備していなければならぬ。今回は定着たからまた良かったが、冬なるとは、フライがためでしたなんておぼろけにもならない。気がたてくれ。くそ、おれも草校さえなければ(いいわけ)！
協力してくれたみなさんありがとうございました。 23

新人合宿のまとめ

リーダー会で出た主な反省事項

- ・石岡にストックは貸さないほうが良かった。(平等の観点から、みんな苦しいのだ。)
- ・鍋をザックの後ろにつけない。コケて鍋を打つと穴があく。
- ・徳本峠の下りでサポートを十分とって隊を分けるべきだった。
- ・腕時計は持ってこさせる。
- ・軍手のチェックをしっかりと。
- ・食料が狐?に食われた。食料はテントの中に入れる。(入り口もしっかり閉める。)
- ・朝起こすタイミングが遅れた。食器返すのが遅い。
- ・悪いことも一年は真似するので上級生は気をつけること。
- ・隊を分けるときは基本的に無線を持たず。
- ・雪上でコケたら必ずピッケルをつかせる。
- ・雨天時にあまり服を着すぎると天場で着る服が無くなるのもっと気を使うように。
- ・エッセン天にポリタンがちらかし過ぎで、集合に余計な時間が掛かる。
- ・槍の下りのフィックス通過で上級生が上に固まりすぎた。
- ・槍の下りのシリセード、グリセード時に上級生が前に固まり過ぎた。
- ・石が雪の下に隠れていて危険だった。
- ・タチセードしない。
- ・先頭に行く人に隊を分けたかどうかきちんと伝える。
- ・フィックスを張る経験の少なすぎるもの同士をフィックスに出してしまった。
- ・各テントごとにごみ袋を作る。
- ・墓参りの時に酒を忘れてしまった。みんな最後に怪我をしたのはこのせいだ、きっと。
- ・夏合宿で雪訓を補充する。
- ・下山報告が遅れてしまった。



年 生

魂

の叫び

【Ⅰ 序論】

今回、僕は中国の民族政策についてというテーマをレポートに選んだ。その理由は、冷戦後の世界の多極化と呼ばれる現象によって「民族」というものに大きな関心が寄せられるようになり、僕にとっても「民族」とは何かということが興味を引くものであったからである。そして、中国の少数民族とマジョリティーである漢民族との関係を検討することによって何か手がかりを掴めないかと考えたのが今回の試みである。レポートの内容は、中国共産党の少数民族の変遷を検討するのが主であるが、その政策の背景としての思想も少し述べてみた。本当は、ケーススタディとしてチベットの状況を扱いたかったのだが、時間がなく断念した。ともかく内容に入っていきたい。

【Ⅱ 中国共産党の少数民族政策】

ここでは中国共産党の少数民族政策が時代と共にどのように変遷していったのかという歴史的過程を検討していきたい。

1921年の共産党結成時から国共内戦期に至るまでの初期共産党時代においては、民族政策は、民族自治権の承認・自由意志による中華ソヴェト連邦の建設という方針を基本としていた。共産党大会では、「自由連邦性」による「中華連邦共和国」という構想が採択されていた。具体的には、1931年の毛沢東を主席とする中華ソヴェト共和国臨時政府成立時に、その憲法大綱で、「中国域内の少数民族の自決権を認め、少数民族が単独の国家をつくるか、中華ソヴェト連邦に加入するか、もしくは中華ソヴェト共和国域内で自治区域をつくるか、については、完全に少数民族みずからが決定するものとす」と述べられている。また、1935年の毛児蓋会議においても民族自決権は認められている。

しかし、第二次世界大戦終結後、内戦期から中華人民共和国成立までの間に、そのような政策は変換された。つまり、少数民族独立の否定・“民族区域自治”（自決権否認）・中国共産党の一元的支配という原則がそれまでの民族の分離権・自決権を承認する方針に取って変わったのである。なぜこのような大きな政策の変換が起こったのだろうか。その原因の一つとして、東西冷戦の影響が考えられる。少数民族は中華から見れば夷戎蛮狄であるから、当然辺境地域、すなわち国境周辺地域に多く分布しており、冷戦体制に対抗する安全保障の必要性から、彼らは政治的軍事的監視下に置かれ、国境を超えた自由な交流を制限され、政治的・文化的自由を剥奪されていった。隣国は中国の社会主義体制と敵対する体制であることが多く、特に資本主義体制を取る国との国境付近に居住する少数民族に自決権を与えることは、資本主義礼賛と民族主義の結合によって独立を引き起こす可能性があり、それは中国にイデオロギー的危機をもたらすことにもなりうるであろう。このような根拠から政策転換が行なわれたと考えられる。

ここで、中共の選択した新しい政策—“民族区域自治”とはいかにして登場したのかという問題について触れておきたい。この区域自治政策は1947年に樹立した内モンゴル自治政府を原型としているようである。大戦終結前後において、内蒙古では、すでにモンゴル人民共和国として成立している外蒙古との統一を求める民族運動が展開されていたが、中共の巧みな工作とソ連の無援助によって突き崩された。その結果、独立運動側の団体である東蒙古人民自治政府の目標、“独立自治”は取り下げられ、諸民族の“平等自治”が提起された。この“平等自治”が“民族区域自治”の原型となったと中共は主張している。そしてこれが先駆的モデルとして全中国の少数民族に適用されていき、現在の民族政策となっていったのである。

次に、中国の民族政策とマルクス・レーニン主義との矛盾について簡単に述べておこうと思う。ソ連では、建て前上とはいえ諸民族の民族自決権が承認されている。そしてソ連は民族自決権を持つ各民族共和国の自由意志で結びついた統一的多民族連邦国家であるということになっている。ところが中国では対照的に、建て前上ですら民族自決権が認められず、従って連邦制は実行されない。これはマルクス・レーニン主義に合致しないように見える。これに対して周恩来や李維漢らが、ロシアと比較して中国の特殊な歴史的事情に言及して説明している。その主な論点を二つ取りあげてみる。第一には、ロシアは十一月革命以前には帝国主義国でありロシア民族は抑圧民族だったが、中国は半植民地・半封建国家で漢族は抑圧民族であると同時に被抑圧民族でもあった。漢族は他の少数民族と共に独立運動を行ない、中国の独立を達成したのだから、少数民族の分離独立は認められない。第二に、十一月革命以前のロシアでは少数民族の人口は総人口の50%前後だが、当時の中国においてはその人口は6%で（1982年の人口調査では

漢族が93%余、少数民族は7%弱) 圧倒的に少数である。さらにその少数民族は漢族その他の民族と雑居もしくは交錯雑居している“大分散・小集居”の状況であって、少数民族が集中して居住しその内部も単純で密なロシアの場合と大きく異なる。このような状況下にあつて少数民族は独立した経済単位を構成していないため、独立の条件が満たされていないし、独立しても援助なしで自立することはできない。以上のような中国の具体的歴史事情が、中国共産党の少数民族独立の否定、民族自決権の否認という政策の公式の根拠ということになる。

こうしてスタートした民族政策はそれでも1957年までは穏健的であつた。このことは1957年8月4日の周恩来報告によく現れているのでその内容を簡潔に述べてみたい。中国には二つの民族主義があり、それらは(1)大民族主義(中国では大漢族主義)、(2)地方民族主義であつて、またこの二つは共にブルジョア民族主義の表れである。どちらも克服すべき対象だが、特に民族差別の誤りを引き起こしうる大漢族主義に注意する必要があるとしている。このように少数民族にはそれほど風当たりが強くない状況が見られる。

ところが同年の八期中全会(9月20日-10月9日)以降民族主義批判が強くなっていく。1958年には大躍進運動が少数民族地域にも導入された。人民公社の出現により、牧畜地帯における家畜の共有化、牧草地の国有化、定住の強制、草地の集団閉鎖などが実施され、漢民族の大量入植が行なわれた。しかし、このような無茶な路線は当然破綻し、それにともない飢饉が襲ってきた。少数民族に不満や反発をもたらしたものはこれだけでなく、その背景にある思想もまた危機感を募らせるものであつた。いわゆる“民族融合論”(漢民族への同化政策、すなわち“大漢族主義”的的民族政策)である。これについては1959年1月16日の汪鋒民族事務委員会副主任の報告に述べられている。まず、歴史的民族融合には二つの状況があると述べている。一つは、歴史発展の必然法則である、各民族が政治・経済・文化的に発展する中での自然な融合で、もう一つは、民族的抑圧のもとでの強制的同化である。現在進行中の民族融合とは、この内の前者に該当するものであり、社会主義革命と社会主義建設を通じての民族間の自然な融合であつて、これを中国諸民族人民は熱烈に歓迎し、積極的に促進すべきであるとしている。この政策に基づいて、少数民族居住地への漢族の大量移住が行なわれ、特にその結果が顕著であつたのは新疆ウイグル自治区であつた。1955年には、ウイグル族の自治区内総人口に占める割合は73.9%、漢族が6.2%であつたのに対し、1982年には、ウイグル族45.9%、漢族40.2%とその割合は大きく変化し、ウイグル族は多数派住民ではなくなったのである。

これに対して、いくつかの地域で民族紛争が発生した。1959年6月から8月にかけて新疆ウイグル自治区のカシュガルにおいて“東トルキスタン共和国”の分離・独立を図る民族運動が展開された。また1959年3月には新疆の南西部でトルコ系住民の監獄襲撃事件が発生した。同年同月にチベットでもチベット人の反乱とダライ・ラマのインド亡命が起き、その後6万人以上のチベット人がネパール・インドに脱出した。

大躍進後、1961年からの劉少奇の指導による経済調整期には民族政策は比較的緩やかになった。しかし1966年に文化大革命が始まると、少数民族を最大の抑圧が襲った。文革期には、民族はブルジョアの存在とされて、宗教や民族文化はすべて破壊の対象となり、漢民族文化が強制された。1976年に四人組が打倒されて文革が終わり、77年に小平が復権して後、改革開放の時代がやってくるが、民族政策は緩和されたと言っても根本的に旧態依然のまままで現在に至っている。

【Ⅲ 中華思想】

次に、中国の伝統的な思想における中華中心主義と周辺民族観について検討し、現在の政策や思想にどのような影響を及ぼしているのかを述べる。基本的に、重沢俊郎著『中国の伝統と現代』の第二章中華思想を主要資料として使用する。

まず、中華思想の根本となる中国の民族的優越感に触れなければならないが、それは前四世紀末の趙の公子成の発言によく表れている。彼は、武靈王が北方征服のために胡服・騎射を採用しようとしたことに反対して、中国優越論を論じ、これを捨てて新政策を取ることに問題を述べている。その発言の中から他国に卓越した中国の特徴を説いた言葉を引用してみる。

「中国者、聰明叡知之所居也。萬物財用之所聚也。賢聖之所教也。仁義之所施也。

詩書礼楽之所用也。異敏技藝之所試也。遠方之所親赴也。蛮夷之所義行也。」(『戦国策』趙)

この八項目を順に訳してみると、(1)漢族の知的水準を誇ったもの、(2)中国を人間の生存に役立つあらゆる財貨が四方から集まってくる場として位置づけるもの、(3)(4)仁義道徳の行なわれることを高く評価し、それを中国固有の特徴と認めたもの、(5)詩書礼楽と共に儒学的価値観に基づいていること、(6)高度に発達し

た優秀な技能を自賛したもの（医業・治水・農牧・各種産業などの技術に重点をおいた発言）、(7)以上の卓越した特徴の故に、遠隔地の人々が見学視察に出かける自的地となっていること、(8)蛮夷が模範として学習の対象にしていること、ということになる。このように、趙国の周辺民族への優位意識が明確に示されており、他の漢族の主要各国も、周辺民族に対して圧倒的に優位な立場にあったことを考慮すれば、趙国と同様の優越意識を持っていたと考えられる。

この民族的優越意識は、戦国時代に明確に形成され、そして漢の時代の公羊学において中国中心的世界観として理論的に成立する。それではその中華主義的世界観とはどのようなものであったのであろうか。ここで『春秋公羊伝』を取りあげてみると、その中に、時代の進行にしたがって社会は進歩し、道義の向上化は発展していくという歴史観を孔子の権威によって強調している部分がある。そしてその歴史観は、時間的連続観だけではなく、時間と不可分に結びつく空間的拡大観をも含んでいた。つまり人間の全面的発展は、春秋公羊学が中国の中心、すなわち世界の中心と擬定している場所（具体的には漢の首都、長安）を基点にして、そこから近隣へ、そして辺境の諸国家へと及ぶという大国主義的世界観である。中国の文化、道徳が全世界に普及したとき、諸国間の差異は消滅し、諸族・諸国の平等対等関係に立つ一つの世界が実現される。それはつまり中国中央の文化的統一の成就を意味する。また、公羊学独自の理念、「大一統」を考えてみても、卓越した求心力による中央集権体制の確立を政治領域と同時に文化、道徳などの精神領域においても追求していく姿勢は、大国主義を生み出しうる中華中心的世界観を支持している。公羊学は、当時の国家の全面的支持を受けているので、中華中心思想が公羊学説の一部であるということは即国家の思想であるということを示す。

秦以後、大国主義とそれと表裏一体関係である霸道主義が大規模化され、周辺民族に強制や干渉を加えていく。そしてそれは中華主義的世界観によって支持され強化されていった。二十世紀に至って、中華人民共和国は「人民革命戦争によって、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の反動支配を覆し、新民主主義革命の偉大な勝利を勝ち取った」（『中華人民共和国憲法』前文）と宣言している。これは封建時代の古い世界観である中華中心思想を否定しているようである。しかし、相変わらず辺境地帯や少数民族への強制、干渉は続いている。このことから中華中心思想とは非常に根深いものであって、決して社会主義によって一掃されていないということがわかるし、また同時に中国の社会主義の現状とは言葉の上での理想とはまったくかけ離れたものであるということが言えるのではないだろうか。

【IV 参考文献】

- 今井 駿他 『中国現代史』 山川出版 1984
- 小島 晋治編 『岩波講座現代中国 第四巻 歴史と近代化』 岩波書店 1989
- 重沢 俊郎 『中国の伝統と現代』 日中出版 1977
- 高崎 通浩 『世界の民族地図』 作品社 1994
- 姫田 光義他 『中国20世紀史』 東京大学出版会 1993
- 毛里 和子・国分 良成編 『原典中国現代史 第一巻 政治(上)』 岩波書店 1994



たせ、こんなしんどい思いをしてまで。たせ、こんな怖い思いをしてまで。常に何かしらの活動をしている時に脳裏をよする。その先に何かあるのか。わかっているようでわかっていない。1つの答えは、極限状態での自分を見てみろ。そこには、日常生活では表すことのない自分が存在している気がする。本来の自分の姿、日常で隠している自分、それとも偽りの自分か。

洞窟 それは暗闇の世界、精神力の世界。それは、それで楽しい。山岳。そこは壮麗な世界、体力の世界。それを楽しみろ。冬山。そこは白い闇の世界、体力、精神力の世界。そこは魅かを感じる。ケイブダイビング。そこは、1人の世界、地球上での究極の探検か。将来やりたいことの1つ。海底。そこは生身ではいけない世界、1人ではいけない世界。宇宙。ここぞ本当の未知の世界。全てのカが必要の世界。果てしなく広がり、行止りのない世界、究極の探検。

人、自然を越える未知のもの。洞窟、山岳、海底、宇宙を越えた魅かを持つもの。人は自然という存在を介して人を探し求めているのか。永遠にわからない。不思議な存在。文明の力に惑わされることなく、己の限界を知らなければならぬ。お金も仕事も生きる1つの手段にしか見えない。生きる目的はどこにあるのか。答えはないのか。人とは何か。

夢は叶うものであり、つかみとるものである。古い仲間との絆を大切に、新しい仲間を得、新たな絆を育み、自分の夢を達成しなさい。

<立命館大学一部学科系探検部>

「大地に夢を、大空に夢を」の旗下に集まった仲間。来るもの拒まず、去るもの追わず。しかし自分で何もしなければ何も得ることのない部。ケイビング、ラフティングは日本の大学でもトップレベルを誇る

29

<参加遠征>

- 1994. 8~9. 44次 中国洞穴調査隊 (広西壮族自治区)
- 1996. 2~3. 75次 " (四川省)
- 1997. 2~3. 76次 " (貴州省)
- 1997. 5~6. ベネチア洞穴調査隊



(スーパ・ホテル島・サウジアラビア)
 (ケブネン国立公園)
 (テレビ東京 後援)

もっと冒険の本を読みたい。そして、植村直己について知りたい。この日の放課後、赤
図書館に行かされた。植村直己の本を全て読むと一番古い本を探し、カバンの中に
持ち行った。この日は先生一言も言葉交わさなかつたが、オレにはわかた。先生が
何を言いたかたのか。この日からがむしゃらに彼の本を読みまくた。
子供の時の事、大学時代、今大陸最高峰登頂、北極点に行つたこと、北極圏を犬ぞり
で走破した事。オレはこの読書で彼の山や冒険に対する情熱を知つた。

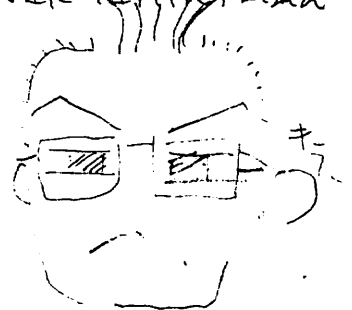
この日オレは彼の最後の本を読んだ。いや正確に言うと彼が書いたのではなく、
他人が彼について書いた本であつた。それは彼の単独犬ぞり南極横断計画
が失敗に終つた。うさばらんと、僕を見せるために登つた、冬期マッキンリー単独登山について
書かれていた。ノー・ジ・モ・サ・バ 位に難境であつた。オレは自分の目を疑つた。
『植村直己 冬期マッキンリーで遭難』。オレは生まれ初めの経験をした。
本を読んで泣いたのである。目から涙があふれ出し、オレは全てを否定したくなつた。
こんな最強な人が死ぬのなら、オレは……。
それまで尊敬してゐた人が死ぬなんて、オレはあふれる涙でまくらぐぬらし、大声で
叫んだ。「何でか？ 何で死ぬんだ？ オレは必ずあなたを目標にしてがんばる
うと思つたのだ」そして心の中で祈つた。いや、おるというおれは現実の事である。
『彼はまだ生きてゐる』。そして誓つた。『オレは絶対登山家になる』と。
この時からあつた。大学に入るなる山に近い信州大学の山岳会に入つてやると
決めたとおる。

オレは高校受験に失敗し、本命でなく、進学校で無い高校に入学し、そこには
山岳部もなく、毎日単調な日々をおくつた。季節は流れ、2年になつた。
この頃は、全てにやる気もなく、成績も下降きまり、信州大もあきらめていたおる
日の古典の時間、先生が雑談を始めた。オレはオレつまらん先生の「4才」と思
ひ、いづこの様子を頭の隅に沈めた。この話は先生の大学時代の話であつた。
「僕は山が好きで、今では社主人と登山に行つたり、本を読んだりして、山の話に
心を躍らせている」
オレはこの瞬間、頭を上げ、話を聞いた。放課後一目散に、先生の所に行き
全てを話した。

子供の時から続けている登山。エベレストや植村直己との出会い。これほどの高校生活でのどの奥につかえたい物語を全てはき出された。それから又、先生に借りて、山の雑誌を読みまくった。マナー、長谷川恒男など。そして、山に対する思いと同じように、輝き求めたアメリカ留学を決意した。そして、今まで生きてきた信州大学山岳会への光を、もう一度輝かせようと思った。

アメリカから帰国し、3年のクラスに編入したが、周りは受験の事など毎トセウ遊んでいる間、私は一人だけ勉強し、信州大学のため、山岳会のため。しかし、まだ「運命の女神は、私が信州大学に入ることを許してはくれなかった。一浪が決定し、数学が出来なかった私は、仕方なく予備校の私大文系クラスに入り、センターが良かったので3教科で入る信大の経済学部を受けおとす思いで勉強した。そして度目の受験、そして合格。だが合格する前は、信大に行くという意志が弱かった。というのも私大本命の関西の難関の大学を受けたからだ。一週間迷ったあげく、松本に再度出向き、行くことにし、やめずにも、もう一度信州大を見ようと思った。

今私は信州大学メンバーとして新入会費を終え、新たな一歩を踏み出そうとしている。今思えば、迷うことなどなかった。最初から私の入学した大学は信州大学と決まっていたから。今、私にとって一番心を熱くしている物は誇りである。今まで中高と落ちこぼれ類に入り、誇りのかけらも持たなかった。留学体験談も、私が誇りに思ってた。それを誇りにおとす自慢の様に言われる生活を過ごしていたが、今、生まれ初めて誇りに出来ることがある。それは、私が信州大学生であること。そして、信州大学山岳会のメンバーであること。これからは、その誇りを大切に。これまでも作り上げてきた信州大学山岳会の歴史を取っ払い、新しい様な登山をやりたい。



1999年度新人合宿についての報告書

先月5月23日に始まった信州大学山岳会新人合宿は同月30日の全隊員下山により無事終わりました。一週間を通して晴れた日が割合多く、思ったより快適に過ごすことができました。初日の歩荷日は朝方は涼しく、楽しく歩けたのですが、昼から午後にかけて気温が上昇し、午後の歩荷はなかなかしんどいものがありました。二日目は雨もバラつきましたが、気温もそこまで下がらず、昼前にも歩荷は終わり、終日BCでゆっくりリラックスすることができました。三日目は雪上訓練の初日で、天気もよく晴れわたり気持ちのいい一日でしたが、唐沢ダッシュには閉口しました。雪訓中にも走り、もうこれでもか、というくらい走っていたような気がします。雪訓も疲れのせいかあまり集中できず、ピッケルストップや雪上歩行法もなかなか身につかぬまま、一日が終わってしまいました。四日目も前日と同じような感じでした。五日目に低気圧の到来を受け、雪訓最終日のはずだったこの日は急遽予定を変更して蝶ヶ岳にのぼりました。山頂付近まで登ったのですが、強風のため登頂は断念、そのまま下山しました。翌日は見事に晴れ、雪訓の総仕上げ、及び次の日に控えていた槍ヶ岳山行のための準備をしました。槍ヶ岳登頂の日は午前二時半に起床し、三時四十五分BC出発。片道11kmを歩き、正午近く山頂に到達。写真を撮るなどして、下山しました。全体を通して、食料をキツネに奪われるなどのハプニングはありましたが、みなケガをしたり体調を崩したりもせず大したトラブル無しで全員無事下山しました。

山岳会一回生

野川謙介

別載 屏風登山隊記録

屏風岩東稜

メンバー: 麦谷水郷、岡本伸也

5/26	5:20	横尾 B.C 発
	6:20	取付着
	7:00	登はん開始
	8:10	東稜取付
	8:40	東稜登はん開始
	12:30	4P 登はん終了
	1:20	懸垂下降開始
	3:40	取付着
	5:00	横尾 B.C 着

東稜は単調なアブミの掛け替えで、特に技術的な核心はない。しかし、屏風岩自体、特に春先には、落石、T4 尾根の取付前のシュルト、そして横尾谷の渡渉に至るまで危険が盛り沢山なので、たかが東稜と侮ることはできない。べつに我々は侮ったつもりはなかったのだが、東稜最後の懸垂でロープが回収できなくなるという事態に陥ってしまった。T3 に着いてからだったからよかったものの、これが東稜の懸垂途中でなっていたらと思うとちょっとぞっとする。ということで、屏風を侮ることなかれ。最後に「日本の岩場・下」の東稜の記述は間違っているので参考にしないように。R&S・No.1 の記述はあっていた。

屏風岩雲稜(戦場に架ける橋)

メンバー: 麦谷水郷、野田聡、梶原忠

5/28	5:00	B.C 発
	6:30	横尾谷対岸
	7:30	T4 取付着
	8:00	T4 登はん開始
	9:00	雲稜取付
	9:40	雲稜登はん開始
	1:00	4P 登はん終了、懸垂開始
	2:45	雲稜取付着
	5:15	B.C 着

昨日、雨で増水していた横尾谷もかなり水が引いたかに見えた。我々3人はいつもの場所、下半身パンツにザック、ピッケルという姿で横尾谷渡渉の準備をする。まずは、麦谷が先頭を切って渡渉を試みるが、川の流れは思いの外速く、胸まで浸水して敗退。3人はパンツの姿で途方に暮れ、川辺をうろつく。うろつくこと30分。対岸からせり出ている倒木を発見、わずか2メートルでこちら側に届こうとしている。しかしその2メートルの川の流れが速い。そこで我々3人は、力を合わせ倒木ををかつぎ込み対岸の倒木に引っ掛け、橋を建築。我々はその橋を「戦場に架ける橋」と名付けた。結局、対岸に渡るのに1時間半費やしたが、今もなお橋は残っている？。



編集：横山 勝丘
表紙：中川 隆志
発行：松本

99年6月23日